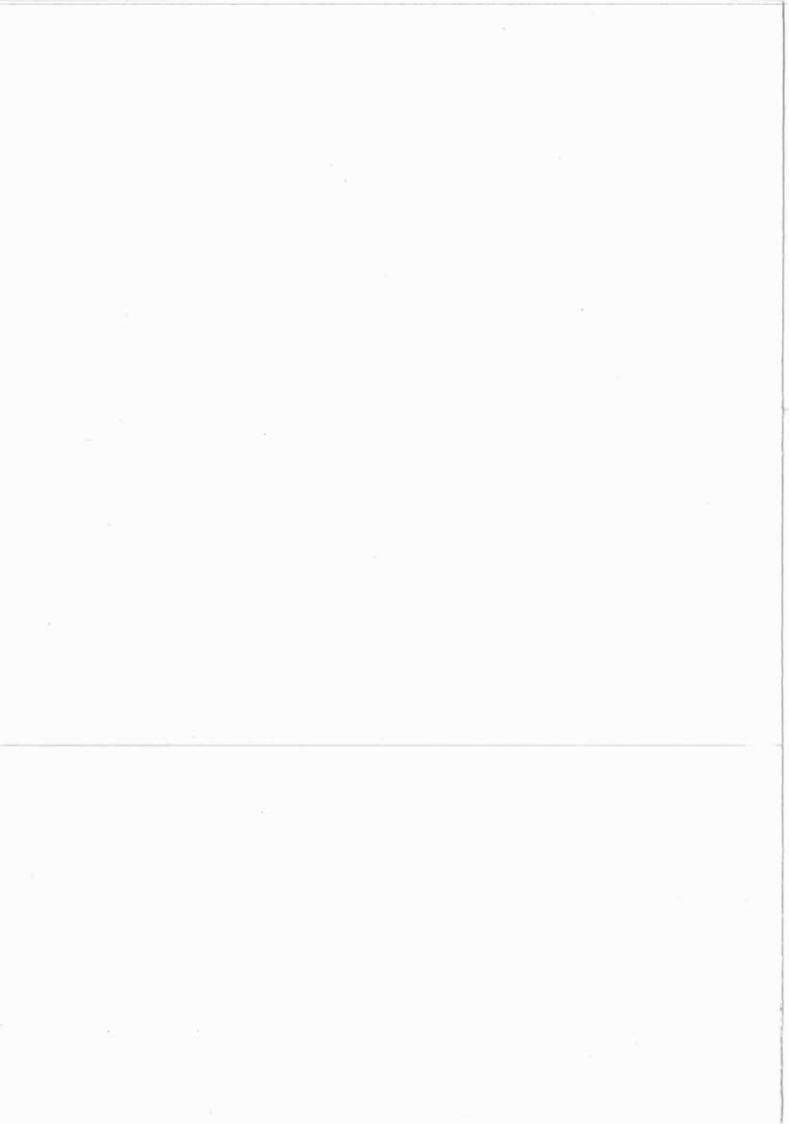


館 浜 G 遺 跡

—平成24年度 松前館浜11道単急傾斜地工事(特対)事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013. 3

北海道松前町教育委員会



例 言

1. 本書は平成24年度に、渡島総合振興局函館建設管理部が行なう、松前館浜11道単急傾斜地工事(特対)事業に関わる、松前町が実施した館浜G遺跡(B-02-122)の発掘調査報告である。
2. 本調査は平成24年7月20日から平成24年10月13日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者：松前町教育委員会 教育長 森 定 勝 廣
調査担当者：文化社会教育課 主 幹 前 田 正 憲
調査員： 同 学 芸 員 佐 藤 雄 生
調査作業員： 皆月ユキ・竹内照子・高橋キヌ子・吉田みどり・吉田多加子・
水牧 武・宝福孝一・相馬卓夫・佐藤高雄
3. 本書の編集・執筆・写真撮影は前田・佐藤が行なった。
4. 出土遺構の実測・整理・トレースは竹内が行なった。
5. 出土遺物の実測・トレースは皆月・竹内・高橋が行なった。
6. 調査期間中、次の諸機関からご指導ご協力をいただいた。

渡島総合振興局函館建設管理部、北海道教育委員会文化財・博物館課、渡島総合振興局函館建設管理部知内出張所、渡島教育局、函館市教育委員会、七飯町教育委員会、木古内町教育委員会、知内町教育委員会
7. 調査に関する諸記録・資料は松前町教育委員会が保存・管理する。

目 次

例言	i
I はじめに	
1. 調査の経緯	1
2. 遺跡の立地と周辺遺跡	3
3. 調査の目的と成果	5
4. 調査の方法	5

II 調査結果

1. 土層堆積状況	9
2. 遺構及び遺構出土の遺物	9
3. 包含層出土遺物	17
III まとめ	37
参考文献	37
報告書抄録	64

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	iv
第2図 周辺遺跡位置図	2
第3図 調査区位置図	4
第4図 遺構配置図	6
第5図 調査区土層断面図①	8
第6図 調査区土層断面図②	10
第7図 調査区土層断面図③	11
第8図 調査区土層断面図④	12
第9図 P-1・P-2・TP-1平面図・土層断面図	13
第10図 P-3・P-4平面図・土層断面図	14
第11図 P-3・P-4出土遺物	16
第12図 P-4・P-5・P-6・P-7・S-1平面図・土層断面図	18
第13図 包含層出土石器①	20
第14図 包含層出土石器②	21

第15図 包含層出土石器③	22
第16図 包含層出土石器④	23
第17図 包含層出土石器⑤	24
第18図 包含層出土石器⑥	26
第19図 包含層出土石器⑦	27
第20図 包含層出土石器⑧	28
第21図 包含層出土石器⑨	29
第22図 包含層出土石器⑩	30
第23図 包含層出土石器⑪	32
第24図 包含層出土石器⑫	34
第25図 包含層出土石器⑬	35
第26図 包含層出土石器⑭	36
第27図 包含層出土石器⑮・陶磁器・金属製品	38

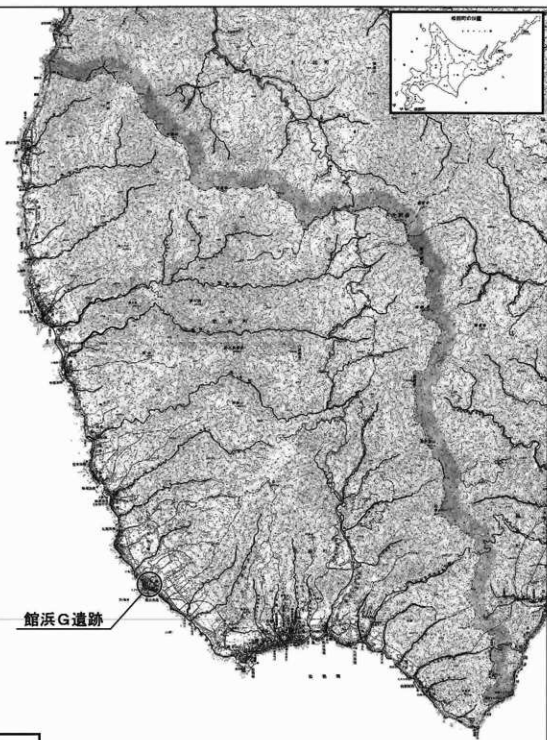
写 真 図 版

図版1 調査区遠景近景	40
図版2 調査状況①	41
図版3 調査状況②	42
図版4 調査状況③	43
図版5 調査状況④	44
図版6 調査状況⑤	45
図版7 調査状況⑥	46
図版8 調査状況⑦	47
図版9 調査状況⑧	48
図版10 調査状況⑨	49
図版11 調査状況⑩	50
図版12 調査状況⑪	51

図版13 調査状況⑫	52
図版14 調査状況⑬	53
図版15 P-3・P-4出土遺物	54
図版16 包含層出土石器	55
図版17 包含層出土石器	56
図版18 包含層出土石器	57
図版19 包含層出土石器	58
図版20 包含層出土石器・石器	59
図版21 包含層出土石器	60
図版22 包含層出土石器	61
図版23 包含層出土石器	62
図版24 包含層出土土陶磁器・金属製品	63

図 表 目 次

表1 出土遺物一覧表	7
------------	---



館浜G遺跡



0 5,000m

※国土地理院発行2万5千分の1地形図
「函館」・「渡島大島」を合成・加筆

第1図 遺跡位置図

I はじめに

1. 調査の経緯

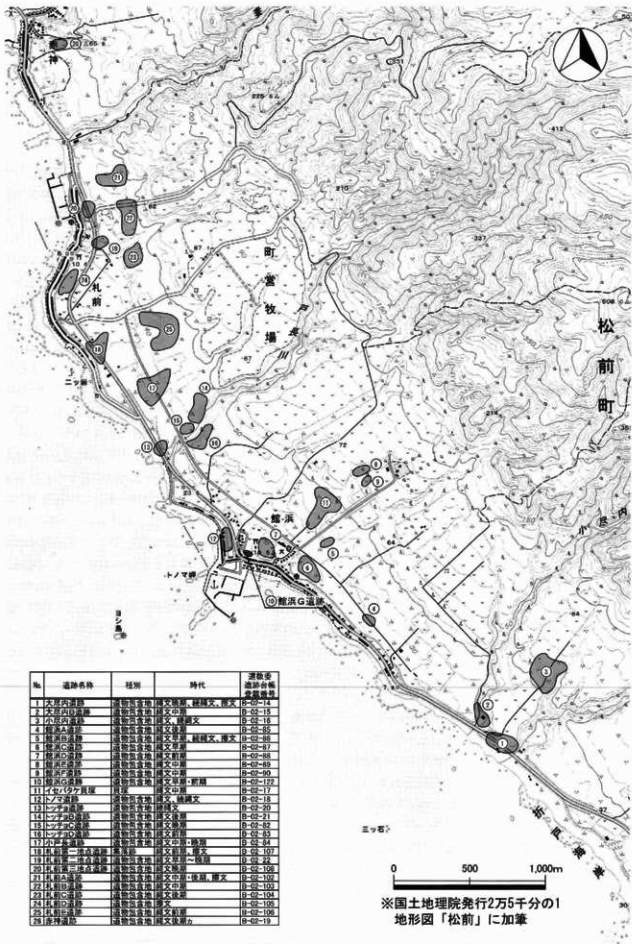
平成 22 年 10 月 27 日付け渡函建松出第 315 号により、渡島総合振興局（以下振興局）長から、「松前館浜 11 道単急傾斜地工事(特対) 事業について、松前町教育委員会（以下町教委）を経由して、埋蔵文化財保護のための事前協議書が北海道教育委員会（以下道教委）教育長宛てに提出された。この中で振興局は事業予定地 4,357.6 m²について、所在確認調査を平成 22 年 12 月に希望した。町教委では当該地付近に館浜 D 遺跡(B-02-88)と館浜 G 遺跡(B-02-122)が所在しており、工事の計画変更の可能性が全く無く遺跡の現状保存が困難であることから、所在確認調査及び試掘調査の必要を記した調査書、振興局からの事前協議書に添付し、平成 22 年 11 月 1 日付けで道教委に提出した。

その後、試掘調査の費用負担について振興局の理解が得られ、平成 23 年 5 月 30 日付け渡函建松出第 167 号により、対象面積 1,184 m²についての試掘調査計画書の提出の依頼があり、平成 23 年 6 月 16 日付け松教文号で計画書を提出し、平成 23 年 6 月 29 日に試掘調査の委託契約を締結した。試掘調査は平成 23 年 7 月 18～19 日に行い、11 地点 11 m²を試掘調査した。調査の結果 5 か所に遺物包含層が発見され、縄文土器 153 点、石器 23 点、礫 183 点、陶磁器 8 点、金属器 4 点の計 371 点が出土した。試掘調査の成果をまとめた (B) 埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書を平成 23 年 8 月 22 日付け松教文号で道教委に提出した。道教委から、平成 23 年 9 月 1 日付け教文第 1647 号により、平成 22 年 10 月 27 日付けの事前協議に対する回答があり、協議区域のうち、館浜 G 遺跡に該当する発掘調査の必要な範囲が示され、町教委がこの 343 m²について発掘調査を行うことになった。振興局は平成 23 年 12 月 2 日付け渡函建知出第 29 号により発掘調査費用要求のための見積書の提出を町教委に依頼した。町教委は町長名で、振興局長宛てに平成 23 年 12 月 9 日付け松教文号により事業計画書を提出した。平成 24 年 2 月 20 日付け教文第 3135 号により道教委から町教委あてに開発事業者と発掘調査計画について打ち合わせを進めるよう通知があった。

平成 24 年 5 月 24 日付け渡函建入第 109 号により振興局長から松前町長宛てに発掘調査の委託依頼があった。松前町は受託し事業計画書を平成 24 年 5 月 30 日付け松教文号で振興局長宛てに提出し、平成 24 年 6 月 26 日付けで委託契約を締結した。

発掘調査は、平成 24 年 7 月 20 日から 9 月末日までと計画してスタートしたが、表土層が予想以上に深く排土量が増加したため、計画変更承認協議書を平成 24 年 9 月 7 日付けで提出した。平成 24 年 9 月 14 日付けで変更委託契約を締結し、発掘調査は平成 24 年 10 月 13 日に終了した。平成 24 年 10 月 15 日付け松教文号により、町教委は道教委に発掘調査の「報告」を提出した。

(前田)



第2図 周辺遺跡位置図

2. 遺跡の立地と周辺遺跡

第1図 遺跡位置図、第2図 周辺遺跡位置図、第3図 調査区位置図

松前町は、海岸線に沿って集落が点在しており、館浜地区は松前市街地から北西へ約6~7kmの場所に形成された集落である。館浜G遺跡は、館浜地区の標高16~20mの低位海岸段丘の縁に位置し、遺跡から約24km南南西の沖には天然記念物『松前小島』を望むことができる。

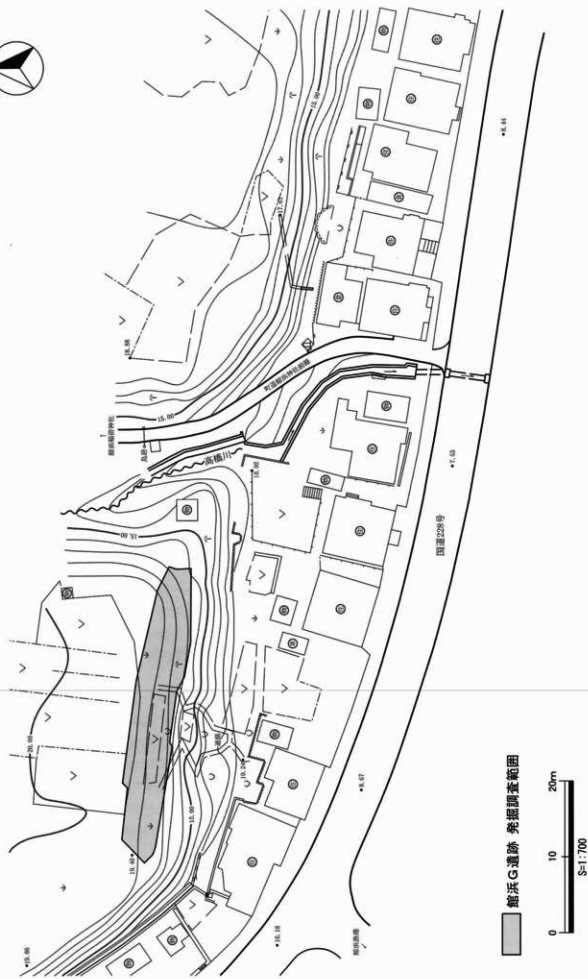
館浜地区は旧来「瀬保田」あるいは「根部田」と呼ばれており、『新羅之記録』において近藤氏が当地に瀬保田館を築いたという記述が初出である。なお、「瀬保田」はアイヌ語地名の「レブ・タ・ナイ」すなわち「海の方にある川」に由来するとされる。「館浜」という地名は、昭和15年に地番改正が行われた際に名づけられたものである。

海岸線の館浜市街地の背後の段丘上には、これまでに9カ所の縄文遺跡が発見されている。今回発掘調査を実施した館浜G遺跡は、平成22年10月25日に遺跡台帳に登載された。

また、この周辺で最も初期に発見された遺跡としては、大正13年に北海道庁から発行された『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』に「根部田村伊勢畑岩址」として報告されているイセバタケ貝塚がある。この遺跡は昭和26年の4月から5月までの2カ月間にわたり農学博士河野広道氏によって発掘調査され、貝層とともに住居跡1基とともに、土器・石器・土製品・石製品・骨角器等計1,500点余が発見された。松前町が発刊した『史蹟とさくら』(1958.9)の中で河野氏は、「イセバタケという名称そのものが北海道的ではないが、イセは「伊勢のへいしはすめなり」の伊勢で、素焼のかめの別名である。ハタケは畑で、イセバタケは「素焼のかめの畑」の意味で、ここの畑には先史時代の土器片が無数に散らばっているのでこの名が生まれたのである。表土の下には貝塚がかくれており、その下層からは数千年前の堅穴住居址や人骨が発見されている。土器は奥羽地方縄文土器文化期の前期と晩期に相当する時代のものであり、貝塚は磯浜性の貝類を主とする珍しいものである。」と説明している。

さらに、昭和37年には、町教委の委託を受け、当時市立函館博物館学芸員吉崎昌一氏らによってトツチョ遺跡と及部(大谷地)遺跡の発掘調査がなされ、トツチョ遺跡では土器約300点と石器が3点出土し、大谷地遺跡では、縄文後期末葉の住居址とともに小型の注口土器が出土し、昭和38年には、市立函館博物館第二研究室の人々を中心となって結成した北海道青年人類学協議会の会員らによって、トノマ遺跡の調査が行われ、縄文時代早期の貝殻文土器群と石器類が約7,000点と、続縄文時代の土器2個体、ガラス玉34個、土製玉1個を含む約100点が出土たとされる。

(前田)



第3図 調査区位置図

3. 調査の目的と成果

渡島総合振興局函館建設管理部は、松前町と地域住民の要望により、この地に「松前館浜11道単急傾斜地工事(特対)」事業を計画した。主な工事内容は「法枠工」と「落人防止柵工」とがあり、対象面積1,184㎡について11箇所の試掘調査を実施した。その結果、発掘調査は工事区域内に二段ある平坦面を含む343㎡について実施することになった。

調査の結果、出土した遺構は以下のとおり。

土壌	7基
Tピット	1基
集石遺構	1基

出土遺物は、土器・石器等8,806点が出土した。各出土状況は、出土遺物一覧表を参照願います。

(前田)

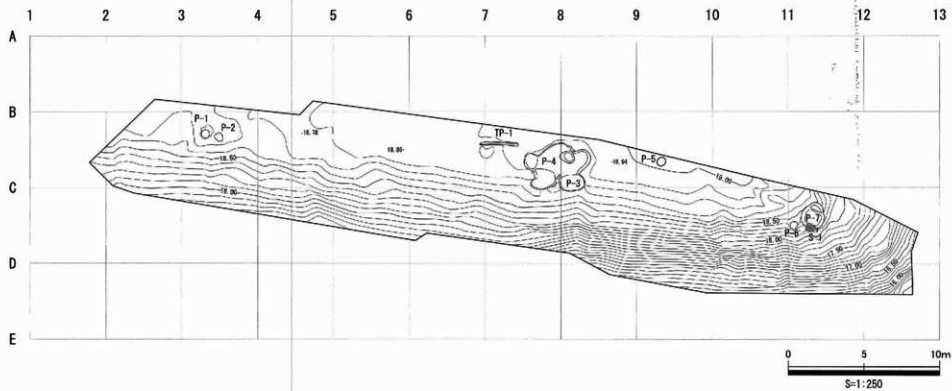
4. 調査の方法

発掘調査にあたって、発掘地のグリッド杭設定業務を委託し調査区を設置した。当初、表土を0.1m程と見積もっていたが、調査の結果0.3mあり、人力で除去した。この増加した分、発掘調査に必要な人工数も増加した。また、調査区周辺は耕作中の畑に囲まれ排土置場が無く、調査区内で掘削と排土置場を持たなければならなかった。そこで、調査は4ブロックに分けて行い、1つのブロックを表土、遺構面、包含層など掘り下げが完了してから、仮置した堀上土の埋戻しを行い、次のブロックを表土から掘り下げ埋戻地に仮置するという方法で調査を行った。

包含層から出土した遺物は、各層位で取り上げ、集中して出土した遺物については、集中個体ごとに取り上げた。遺構から出土した遺物については、必要に応じ平面実測し、個体ごとに標高を計測し取り上げた。出土した遺構については、平面・断面図等を作成した。土層観察用畦は必要に応じ設定し、土層堆積状況を記録した。そして、これら遺構・遺物の出土状況や土層堆積状況はすべてデジタルカメラで撮影した。

整理作業は、平成24年10月22日から開始し平成25年3月29日まで実施した。

(前田)



第4図 遺構配置図

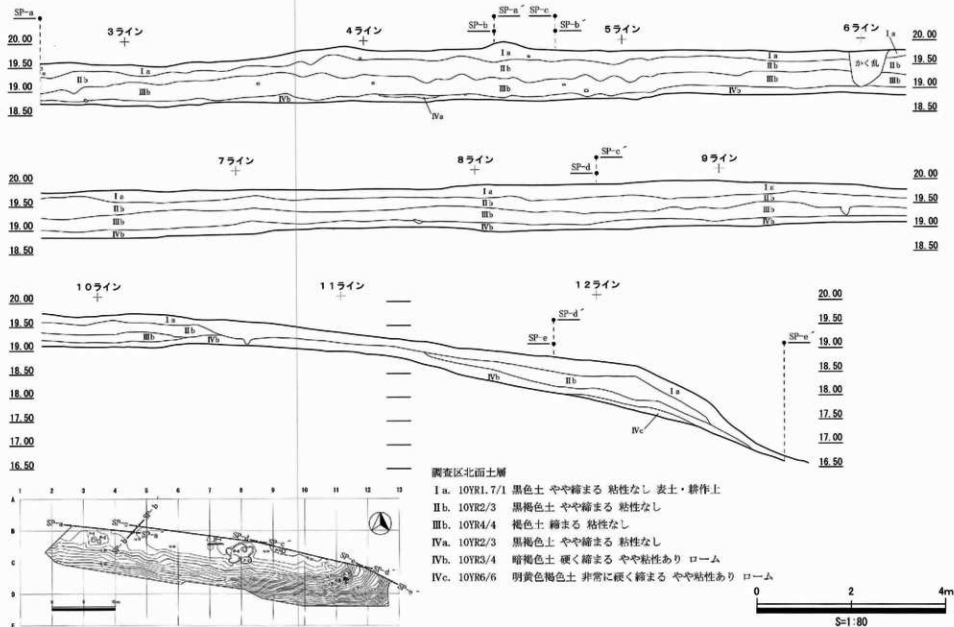
表1 出土遺物一覧表

包倉層出土遺物										(点)	
フリット	層位	土器	石器	礫石器	石鏝	鏝	陶磁器	金属	ガラス	その他	計
B-2	I	451	51	16	6	94	19	2			639
	II	14	5	7	1	6					33
	III	8				2					10
B-3	I	650	49	12	7	114			7		839
	II	312	32	11	2	46					403
	III	196	42	2	1	4					245
B-4	I	909	83	14	27	39	13		20	1	1106
	II	233	30	5	2	4					274
	III	132	24	3	6	7	2				174
B-5	I	65	14	8	9	16	2	2	1	5	122
	II	659	47	4	14	3	1				728
	III	402	22	13	34	8					479
B-6	I	43	13	3	6	14	7		2		88
	II	289	27	13	11	15					335
	III	328	27	19	23	7				1	405
B-7	I	80	9	16	5	1	7		3		121
	II	143	14	6	5	2	3				173
	III	44	3	2	5	5					59
B-8	I	7	1	2	2	8	8		5		33
	II	7	2	2	2	6	1				20
	III	166	11	7	7	11				1	203
B-9	I	66	2	2	8	15	1				94
	II	48	7	4		1					60
	III	42	8								50
B-10	I			2	1						3
	II	16	5			1					22
	III	4	1								5
C-2	I	6	2		1	4		3			16
	II	7	2		1						10
	III	12	2	2	1	4					21
C-3	I	12	4			6					22
	II	15	1	1	2	19	4				42
	III	15	4	1	2	3	1				26
C-4	I	85	17	5	3	30	4	2			146
	II	23	3	2	16	7					51
	III	39	6	4	1	6	2	2	1		61
C-6	I			1	1						2
	II	31	6		1	14		1		18	71
	III	38	10	4	3	20	2	1		3	81
C-8	I	61	4		6	2					73
	II	52	6	4	5	24	4	4	4		103
	III	47	3	1	1	3	1		2		58
C-9	I	13	2		1						16
	II	7			1	2	1				11
	III	12	5	1	1	2	6	3	1		31
C-11	I	24	9	9	3	11	29		4	2	91
	II						2				2
	III	3					12		2		17
D-8	I				1	1	4				5
	II	1			1	1					3
	III	6	3		2	2	1	1			15
D-10	I	16	2	10	7	21	14	1	5		76
	II	25	3	1		3	2			1	32
	III	2	1		1	1	14	1	8		28
D-11	I	1				2	10				13
	II					2	2			5	10
	III	143	15	11	22	15	8	4			218
計		5991	639	230	267	630	188	27	70	32	8074

遺構出土遺物

遺構名	土器	石器	礫石器	石鏝	鏝	陶磁器	金属	ガラス	その他	計
P-1	1									1
P-2	1									1
TP-1		2		1						3
P-3	56	8	2		96					162
P-4	243	39	10	17	101					410
P-5					2					2
P-6					4					4
P-7	1				7			2	1	11
S-1	2				121	1	12			138
計	304	49	14	18	331	1	12	2	1	732

出土遺物合計 8806 点



第5図 調査区土層断面図①

II 調査結果

1. 土層堆積状況

第5図 調査区土層断面図①、第6図 調査区土層断面図②、第7図 調査区土層断面図③、
第8図 調査区土層断面図④

現在、調査区を含む段丘上の平坦面は畑地として利用されている。昭和30年代の航空写真においても、畑として利用されていることが確認できるほか、大正7年の土地連絡図においても地目は畑となっている。調査区は東西約55m、南北約8mと横長で、南は海に面した急傾斜、東は小川に向かって傾斜している。

I層は黒色土で、イタドリを中心とした草の根が繁茂している。最近時の耕作による攪乱に加え、生ゴミを捨てるための穴もI層に含めた。調査区西端では電柱のアンカー埋設による攪乱が著しい。II層は黒褐色土を主体とする堆積土で、部分的に最近時の攪乱が達している。III層は褐色土で、部分的に最近時の攪乱が達しているが、これより下層が本来的な縄文時代の遺物包含層とみられる。IV層は暗褐色土を主体とするローム層である。

住民の話によれば、調査区付近はイカ乾しのための納屋が建てられたことがあるらしく、9ラインから11ラインのセクションに2ヶ所みられる柱穴痕のような窪みは、納屋の本柱跡の可能性がある。

2. 遺構及び遺構出土の遺物

第4図遺構配置図

遺構は調査区西端と中央の平坦部、東側の傾斜部で検出された。以下、遺構ごとに調査結果を記す。

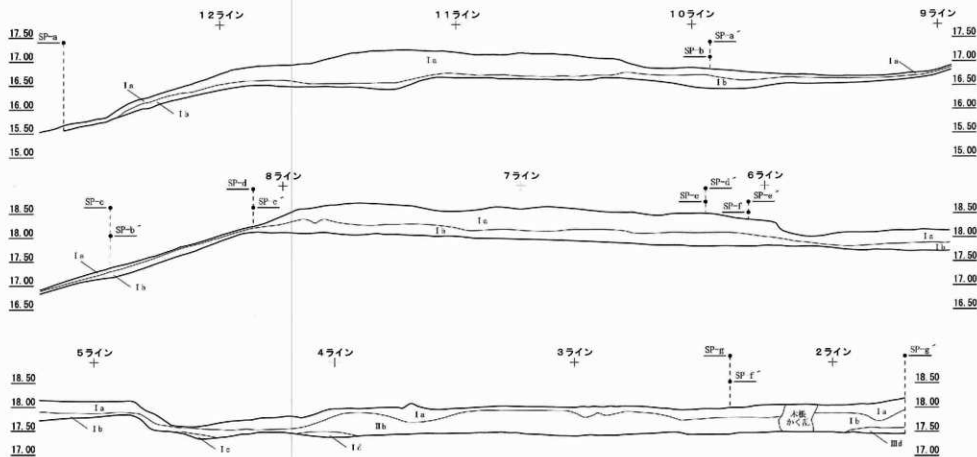
第9図 P-1・P-2・TP-1 平面図・土層断面図

・P-1、P-2

本遺構は、調査区西端のIII層上面において、隣接した状況で確認された。P-1のプランは長軸58cm、短軸52cmの円形で、深さ12cmを測る。P-2のプランは長軸60cm、短軸54cmの円形で、深さ15cmを測る。いずれの覆土にも少量の焼土がまだらに混入している。出土遺物は土器片がそれぞれのピットから1点ずつ出土しているが、小片であるため図化に至らなかった。同時期のものか時期差があるのかは不明である。

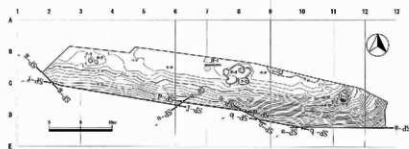
・TP-1

本遺構は、地山ロームまで掘り下げた時点で、東西方向に細長く伸びる黒色土のプランとして検出された。南北方向に直交するかたちでトレンチ調査を行ったところ、断面U字型の掘り込みを確認したことから、Tピットと判断した。底面において杭穴などは確認されなかった。プランは長軸265cm、短軸24cm、最深部は52cmを測る。底部は概ね平坦で、断面は長方形を呈する。覆土からは剥片2点と安山岩の石鏝1点が出土している。

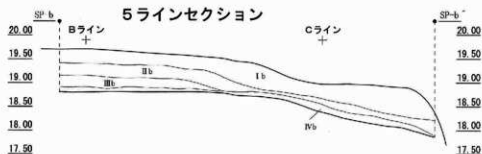
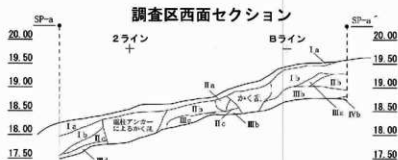


調査区南面上層

- I a. 10YR1.7/1 黒色土 軟らかい 粘性なし 表土
- I b. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし
- I c. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし 1 cm前後のロームブロック混入
- I d. 10YR3/4 暗褐色土 締まる 粘性なし
- III d. 10YR2/3 黒褐色土 締まる 粘性なし 1 cm前後のロームブロック混入、1~3 cmの砂利混入

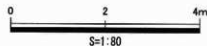
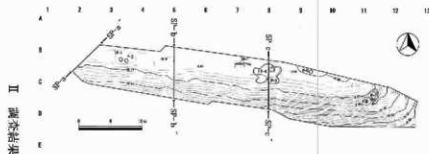
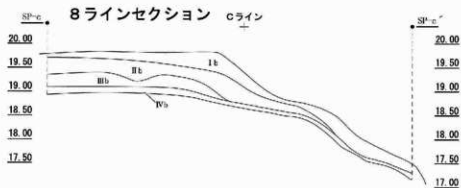


第6図 調査区土層断面図②



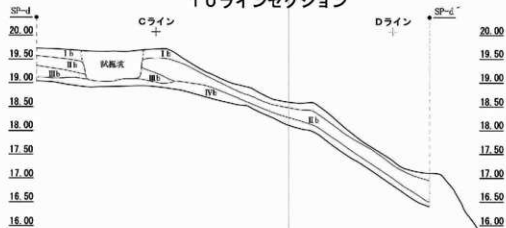
調査区西面・5ライン・8ライン土層

- I a. 10YR1.7/1 黒色土 やや締まる 粘性なし 表土
- I b. 10YR1.7/1 黒色土 やや締まる 粘性なし 表土
- II a. 10YR3/2 黒褐色土やや軟らかい 粘性なし
- II b. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし
- II c. 10YR4/4 褐色土 やや軟らかい 粘性なし
- II b. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし
- III a. 10YK3/3 暗褐色土 やや締まる 粘性なし ローム粒微量混入
- III b. 10YR4/4 褐色土 締まる 粘性なし
- III c. 10YR1/4 褐色土 締まる 粘性なし
- III b. 10YR2/3 黒褐色土 締まる 粘性なし ローム粒微量混入
- IV b. 10YR3/4 暗褐色土 硬く締まる やや粘性あり ローム



第7図 調査区土層断面図③

10ラインセクション



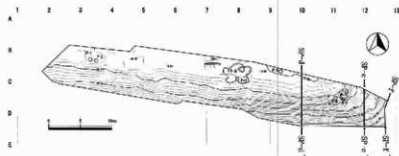
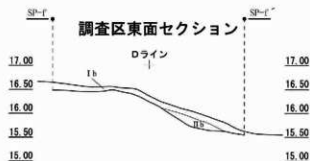
12ラインセクション



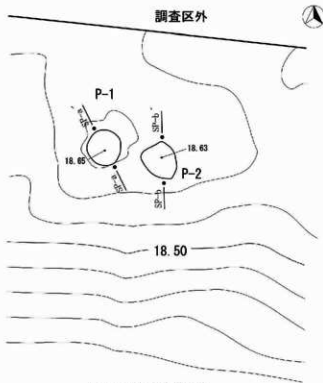
10ライン・12ライン・調査区東面土層

- I a. 10YR1.7/1 黒色土 やや締まる 粘性なし 妻土・耕作土
- II b. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし
- III b. 10YR4/4 褐色土 締まる 粘性なし
- IV b. 10YR3/4 暗褐色土 硬く締まる やや粘性あり ローム

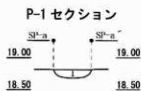
調査区東面セクション



第8図 調査区土層断面図④



P-1・P-2 平面図



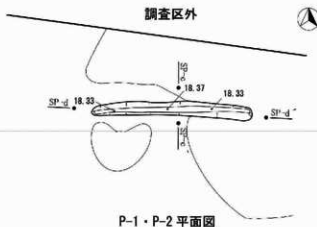
P-1 土層

1. 10YR3/4 暗褐色土 非常に硬く締まる やや粘性あり 焼土微量混入



P-2 土層

1. 10YR3/4 暗褐色土 非常に硬く締まる やや粘性あり 焼土微量混入



P-1・P-2 平面図



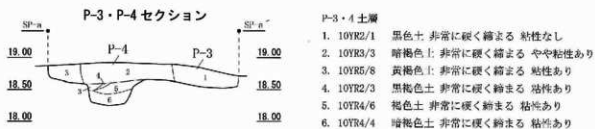
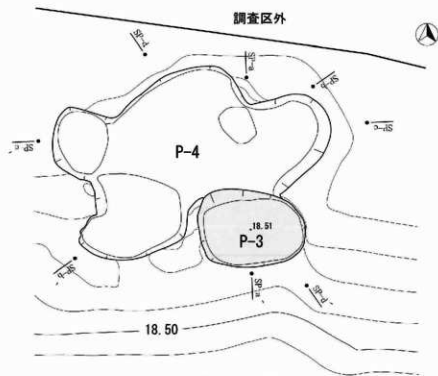
TP-1 土層

1. 10YR2/2 黒褐色土 やや軟らかい 粘性なし
2. 10YR2/3 黒褐色土 やや締まる 粘性なし ロームブロック微量混入
1. 10YR5/6 黄褐色土 硬く締まる やや粘性あり (地山ローム)
1. 10YR4/4 褐色土 硬く締まる やや粘性あり (地山ローム)



第9図 P-1・P-2・TP-1 平面図・土層断面図





P-3・P-4 エレベーション



第10図 P-3・P-4 平面図・土層断面図

第10図 P-3・P-4 平面図・土層断面図、第11図 P-3・P-4 出土遺物

・P-3

本遺構は、地山ルームまで掘り下げた時点で、楕円形の黒色土のまとまりとして検出され、さらに掘り下げたところ、明瞭な立ち上がりが確認された。プランは長軸178cm、短軸127cmで、深さ48cmを測る。P-4と切り合っており、P-4よりも新しい。

覆土から土器片56点、石器8点、礫石器2点、礫95点の計162点が出土している。1・2は底部が尖底となるものである。1)は胎土に少量の黒雲母を含む。2)は胎土に3mm前後の砂利を少量含んでおり、外面に縦方向の細く短い調整痕がみられる。3)・4)は頁岩製のつまみ付きナイフである。いずれもつまみが明瞭で、3)は片面調整して刃部を作り出しており、4)は身部が両面調整によって作り出されている。5)は扁平な安山岩の片側を敲打しており、片面の約半分が剥離している。たたき石として用いたか、石錘を作ろうとしたが剥離が大きかったことで放棄された可能性もある。

・P-4

本遺構は地山ルームまで掘り下げた時点で、不定形の褐色土のまとまりとして検出された。堆積土は均一に硬く締まっている。短期間に数回にわたって掘られたものとみられる。P-3と切り合っており、P-3よりも古い。柱穴等は確認されなかった。

出土遺物は、土器205点、石器35点、礫石器24点(うち15点は石錘)、円礫91点である。6)は胎土に黒雲母を多く含み、撫糸文が施される。底部の器壁は1cmと厚い。7)は胎土に黒雲母を多く含み、口唇部がやや外反し、厚みがある。内外面に貝殻条痕文が施される。8)はやや内湾ぎみに立ちあがるもので、外面口唇部に横位の、体内に斜位の貝殻条痕文が施され、内面は貝殻条痕文がみられる。9)は厚みのある器壁で、胎土に砂を多く含む。外面には右上から左下にかけての調整痕がみられ、約1cmの筒状工具による刺突文がある。10)は器壁が4mmと薄く、縦横方向に細い撫糸による絡条体王痕が施される。また、横位の細貼付帯が廻り、貼付帯の間には短縄文が充填される。11)は貝殻条痕文を羽状縄文のように施文したもので、文様帯を横位の沈線文で区切っている。胎土には2.3mmの砂が多く含まれる。

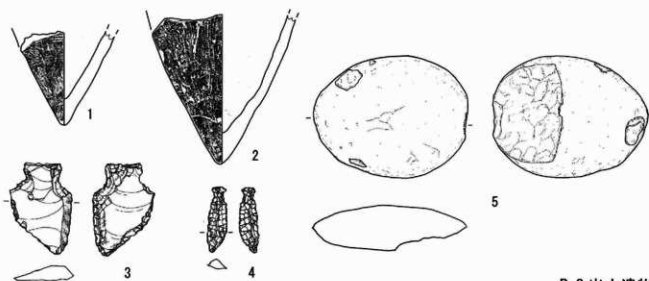
12)・13)は頁岩製のスクレイパーで、両側縁に刃部が作られる。13)の中央部には小さな穴が開いているが、穿孔によるものではない。14)は扁平な泥岩製のすり石で、周縁に黒い擦痕がみられ、大きく欠損している。

15)・16)は安山岩製の石錘である。いずれも扁平な円礫を利用している。

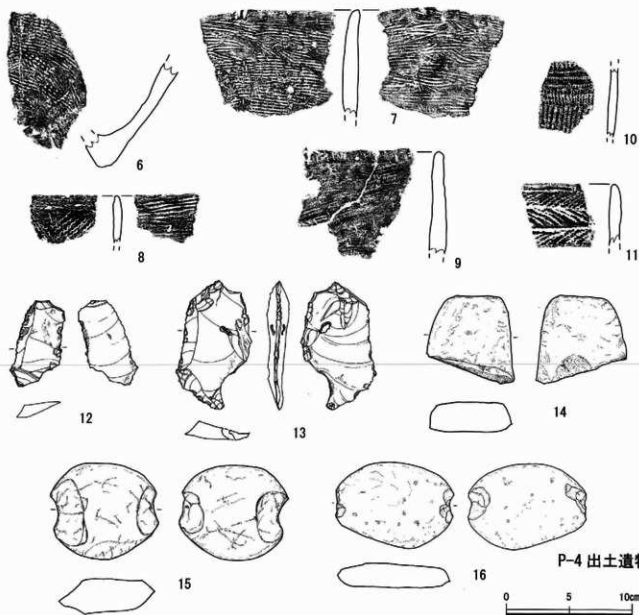
第12図 P-4・P-5・P-6・P-7・S-1 平面図・土層断面図

・P-5

本遺構は地山ルームまで掘り下げた時点で、円形の暗褐色土のまとまりとして検出された。覆土上面には1cm前後の小砂利が少量みられた。プランは直径約60cm



P-3 出土遺物



P-4 出土遺物

第 1 1 図 P-3・P-4 出土遺物

の円形を呈し、深さ 18 cm を測る。ピット底面直情に楕円形の礫が 1 点集土している。

・ P-6

本遺構は、地山ルームまで掘り下げた時点で、南側にやや傾斜した場所において円形の黒褐色土のまとまりとして検出された。プランは直径約 55 cm の円形を呈し、覆土から小礫が 4 点出土している。

・ P-7、S-1

本遺構は、P-6 に隣接して検出された。I 層・II 層を攪乱として掘り下げてしまったことから、P-7 のプランは地山ルーム面のものを図化している。試掘調査時に、本地点においてゴミ穴を検出しているが、本遺構に該当するものであり、出土遺物に近代の陶磁器片が含まれる。S-1 集石遺構も、本来的には P-7 に含まれるものである。

3. 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は、縄文土器、石器、礫石器、陶磁器、金属製品、ガラス等がある。多くは調査区北側の平坦部から出土したものである。以下に図化したものについて記す。

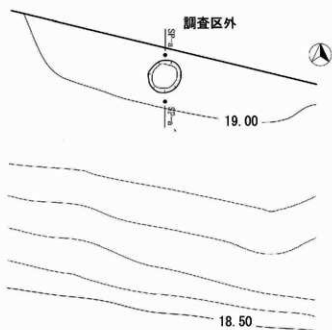
・ 土器

第 13 図 包含層出土土器①

17) は実底となるもので、底部に厚みがある。外面には密に撫糸文が施される。18) はやや外反ぎみに立ちあがり、外面口唇部には鋭利なものにより横位の短い沈線が施され、その上から 1.5 cm 間隔で 2 段の浅い刺突文が施される。また、体部には斜めに短い沈線文が施され、5mm 程度の穴が穿孔される。19) は内外面に貝殻条痕文がみられ、その上から鋭利なものによる沈線が施される。胎土には黒雲母を多く含む。20) はやや厚みのある器壁で、口唇部は指で押すことにより波状を呈する。外面は横位に撫糸文が施される。21) は外反ぎみに立ちあがり、外面には L R 斜行縄文と R L 斜行縄文が交互に、その上から 4、5 cm 間隔で縦方向に縄線文が施される。体部下半は、やや太めの R の縄線文が縦方向に施される。口唇部の 3 cm 下に補修のための穴が 2 か所穿孔されている。22) は比較的硬い焼き上がりで、外面口縁部上面に L の短縄文が施され、同一原体により外面口唇部にも縄線文が施される。体部外面には縦方向と横方向に絡条体圧痕文が、内面にはヘラ状工具による調整痕がみられる。23) は砂を多く含む胎土で、比較的もろい焼き上がりである。横位の短い撫糸文と、同一原体によるランダムな施文がみられる。24) は器壁が厚く、内外面に貝殻条痕文が施され、外面には上から刺突文が施される。25) はやや割り底になっており、外面には L R 斜行縄文と、高台脇に R L の縄線文が施される。

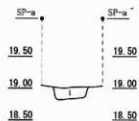
第 14 図 包含層出土土器②

26) は鋭利な工具により断面 V 字状の沈線文が施される。27) は口唇部に断面三



P-5 平面図

P-5 セクション



P-6 土層

1. 10YR3/4 暗褐色土 非常に硬く締まる やや粘性あり

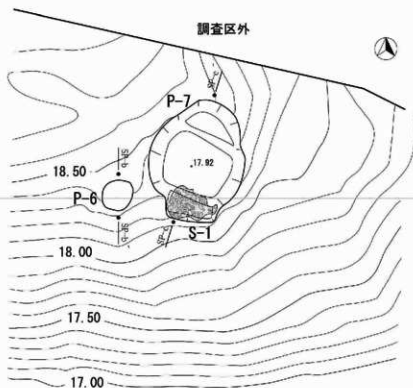
P-6 セクション



P-6 土層

1. 10YR3/1 黒褐色土 硬く締まる 粘性なし

P-7 エレベーション



P-6・P-7・S-1 平面図

第12図 P-4・P-5・P-6・P-7・S-1 平面図・土層断面図



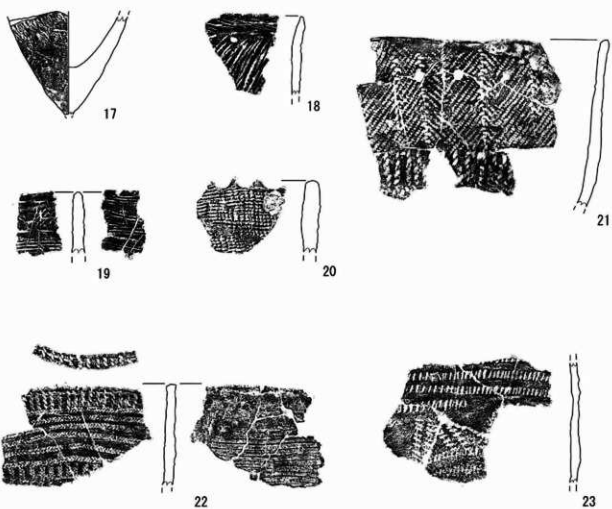
角形の隆帯が作り出され、外面には同一原体によるLRの斜行縄文が方向を変えて施される。内面は口唇部下約4cmまで只殻条痕文がある。28)・29)は同一個体の可能性があり、器壁が4mmと薄く硬い焼き上がりである。胎土も雑物が少なく、内面は調整により滑らかになっている。外面は、縦方向の細貼付帯の内側を羽状の短縄文で充填し、その他は細い絡条体圧痕文を施している。30)は器壁が4mmと薄いものの、胎土に雑物が多く含まれ、軟質な焼き上がりとなっている。口縁部上面を爪あるいは棒状工具により波状とする。外面口唇部には貼付により2条の隆帯を作り出しており、その中を短縄文で充填する。体部は細い絡条体圧痕文を施している。31)は外面口唇部直下に細貼付帯があり、体部は羽状縄文が施される。32)は平底で体部には短縄文と細い絡条体圧痕文が施される。33)は口縁部破片で、地文は絡条体圧痕文、縦に刺突文が施され、そのうち一つは貫通している。内面は貝殻腹縁文が施される。34)は胎土に砂や黒雲母を多く含んでおり、器形は垂直に立ちあがって口唇部で断面三角形にやや肥厚している。内外面に貝殻条痕文が施され、外面には部分的に貝殻腹縁文と刺突文がみられる。35)は口縁部破片、地文は絡条文で、外面には貝殻腹縁文と刺突文が加わる。

第14図 包含層出土土器③

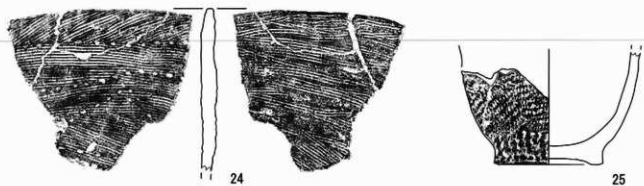
36)は尖底で、口唇部が外側へくの字に折れ曲がる。内外面の胴部まで只殻条痕文が施される。37)は胎土に砂と黒雲母を多く含み、地文はRL原体の絡条文で、口唇部上面に短縄文が押し込まれる。38)は胎土に1~3mmの砂を多く含み、外面に貝殻腹縁文、内面に貝殻条痕文が施される。39)は外面に刺突文が施される。40)は外面口唇部直下に刺突文、体部に貝殻条痕文が施される。41)は尖底のミニチュア器で、外面に鋭利な工具による短い沈線文が施される。42)は胎土に砂を多く含み、口唇部がやや外反する。外面には鋭利な工具により植物を意識したかのような沈線文が施され、口唇部直下に貝殻条痕文が廻る。43)は竹管のような工具により口唇部を波状にし、内外面に細い絡条体圧痕文が施される。44)はやや判り底となっており、外面に沈線文がランダムに施される。

第16図 包含層出土土器④

45)は判り底となっており、胎土に雑物が多く含まれるが、硬質な焼き上がりとなっている。外面には沈線文と絡条体圧痕文がみられる。46)は胎土に砂を多く含み、器壁も厚い。外面の地文は絡条文で、口唇部直下と胎部に刺突文が、内面は貝殻条痕文が施される。47)は外面に横位と斜方向に絡条体圧痕文が施される。48)は口唇部直下に細貼付帯が作り出され、口唇部とともに等間隔に刻みが付けられる。その間を絡条体圧痕文で充填し、同一原体により体部にも斜方向の施文がみられる。49)は平底土器で、LRの斜行縄文が施される。50)はくびれが明瞭な平底土器である。体部は細い絡条体圧痕文で、くびれの部分はやや太めのRLの絡条体圧痕文である。51)の地文は貝殻腹縁文で、波状の沈線文で区画される。52)は口縁部破片である。外面は横位の絡条体圧痕文で、内面にも縄による圧痕がみられる。53)は刺突文と、それを繋ぐように沈線文が施される。54)の口唇部は外反し、上面に縄による圧痕が見られる。内外面に横位と斜方向の絡条体圧痕文が施される。55)は小型の尖底土器で、胎土に黒雲母を多く含み、器壁は厚い。外面は横位と斜方向



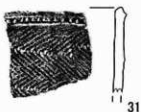
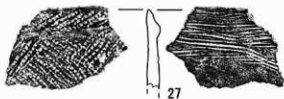
B-3 I 層



B-4 I 層



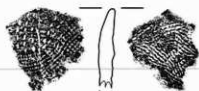
第 13 圖 包含層出土土器①



B-4 I 層



34

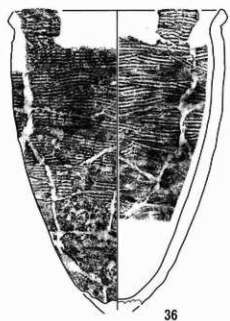


35

B-5 I 層



第 14 図 包含層出土土器②



36



37



38

B-6 I 層



39



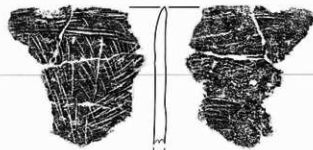
40

B-7 I 層



41

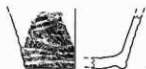
B-8 I 層



42



43

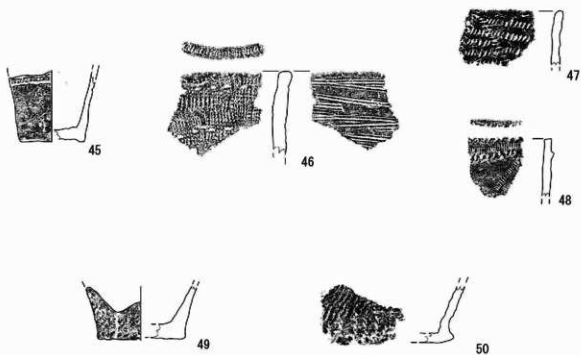


44

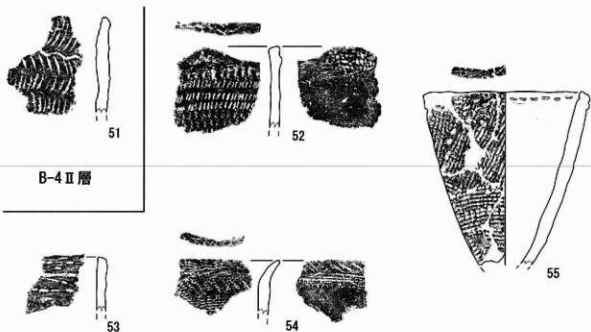
B-9 I 層



第 15 図 包含層出土土器③



B-3 II 層

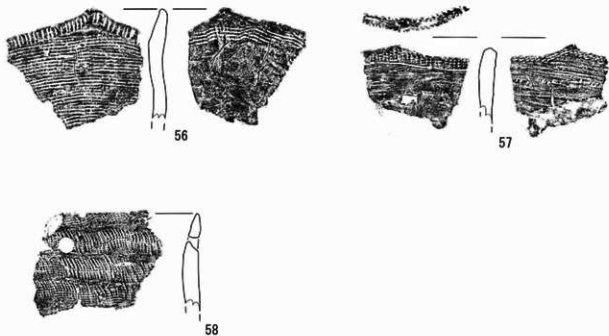


B-4 II 層

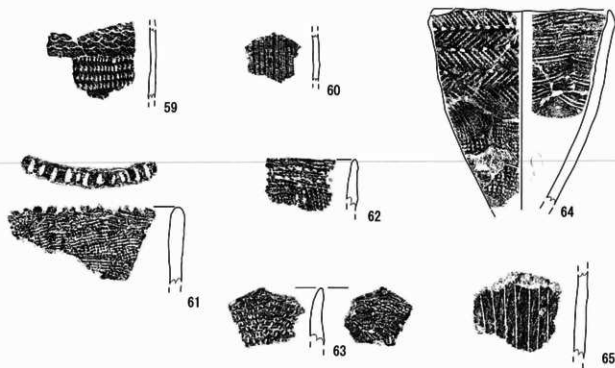
B-5 II 層



第 16 圖 包含層出土土器④



B-5 II 層



B-6 II 層



第 17 圖 包含層出土土器⑤

縄文で、内面口唇部直下と外面全体に刺突文が施される。

第17図 包含層出土土器⑤

56) の外面地文は横位の貝殻条痕文で、口唇部には短縄文が押圧される。内面口唇部直下にも貝殻条痕文が廻る。57) の外面体部は調整痕のみで、口唇部に横位の沈線と短縄文が廻る。58) はやや外反ぎみに立ちあがり、外面は波状貝殻文が、口唇部は細い絡条体疔痕が施され、直下に穿孔穴がみられる。59) は、横位の綾絡文と絡条体疔痕文が施される。60) は緻密な胎土で、縦方向に幅2mm程度の貼付帯を持ち、内側を絡条体によって充填している。61) は厚みのある器壁で、口縁部上面を棒状工具で波状に加工している。外面は格子状の押型文で、所々に刺突文がある。62) は地文が絡条体によるもので、口唇部直下に刺突文が廻る。63) は外面地文が刺突文で、内面口唇部直下に格子状の押型文がみられる。64) は小型の尖底土器とみられ、底部が欠損している。口縁部は断面三角形となり、外面の上半部は貝殻腹縁文を羽状に施し、刺突文が廻る。下半部は貝殻腹縁文を縦方向に施している。内面上半部は貝殻条痕文が施される。65) は胎土に砂を多く含む。外面は鋭利な工具により縦方向に沈線文が施される。

第18図 包含層出土土器⑥

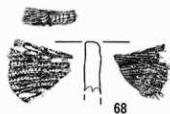
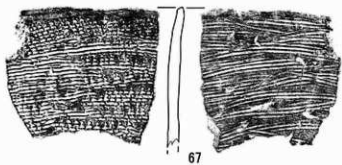
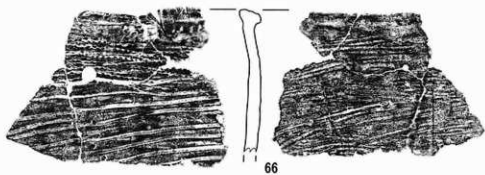
66) は内湾ぎみに立ちあがり、外面口唇直下に隆起帯を設けており、断面T字型を呈する。外面は貝殻腹縁文とヘラ状工具による横位の沈線文が施され、穿孔穴がみられる。内面は貝殻あるいはヘラ状工具による調整痕がみられる。67) は外面に絡条体疔痕文と押し文が施され、内面は貝殻条痕文である。68) は厚みのある器壁で、外面は貝殻腹縁文と刺突文、内面は貝殻条痕文が施される。69) は内湾ぎみに立ちあがる無文土器である。70) は尖底土器とみられ、底部が欠損する。波状口縁で、外面口唇部直下は貝殻腹縁文、体部は貝殻条痕文となる。71) は外面口唇下6cmまで横位の燃糸文が施され、所々に刺突文がみられる。

第19図 包含層出土土器⑦

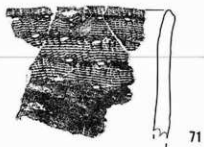
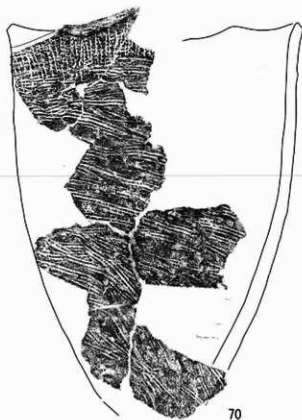
72) は器壁が3mmと薄く、外面に押型文とLR原体による斜行縄文が施される。73) は外反する口縁部を持ち、外面に絡条体疔痕文が施される。74) は小型の尖底土器で、口唇部直下に刺突文がある以外は無文である。75) は小型の浅鉢とみられ、平底となっている。外面に絡条体疔痕文が施される。76) は尖底で、外面の地文は燃糸文である。77) は口唇部直下に刺突文がある以外は無文である。78) は厚い器壁を持ち、外面に貝殻腹縁により植物の葉脈をかたどったように施文されている。79) は口縁部上面を鋭利な工具で波状とし、外面は貝殻腹縁文と燃糸文が施される。80) は乳房状の尖底となっており、胎土に砂を多く含む。外面は調整痕がある以外は無文である。81) はおそらく尖底土器とみられ、胎土には3mm程度の砂利が含まれる。体部の地文は燃糸文である。

第20図 包含層出土土器⑧

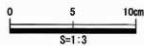
82) は外面口唇部直下に刺突文が廻り、体部は貝殻条痕文が施される。口唇部上面にも貝殻条痕文のような沈線がみられる。83) は外面に絡条体疔痕文が施される。84) は外面に燃糸文が施される。85) は外面口唇部に横位の縄文疔痕と刺突文が、体部は燃糸文が施される。内面は絡条体疔痕が施される。86) は2条の刺突文が廻



C-8 II層



C-9 II層



第18図 包含層出土土器⑥

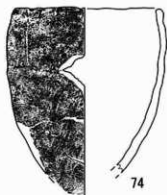


72



73

B-3Ⅲ層

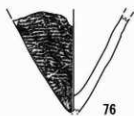


74



75

B-4Ⅲ層



76



77



78

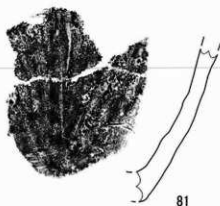


79

B-5Ⅲ層



80

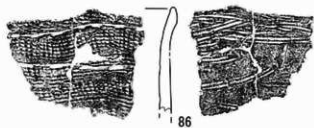
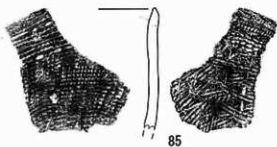
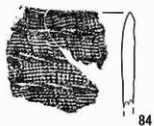
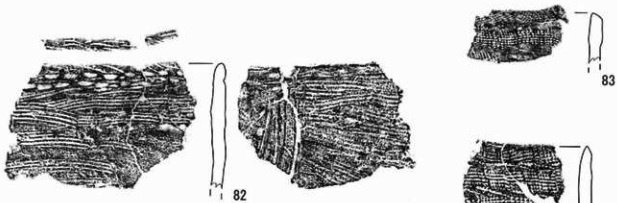


81

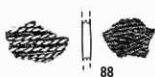
B-6Ⅲ層



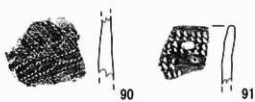
第19図 包含層出土土器⑦



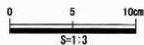
B-6Ⅲ層



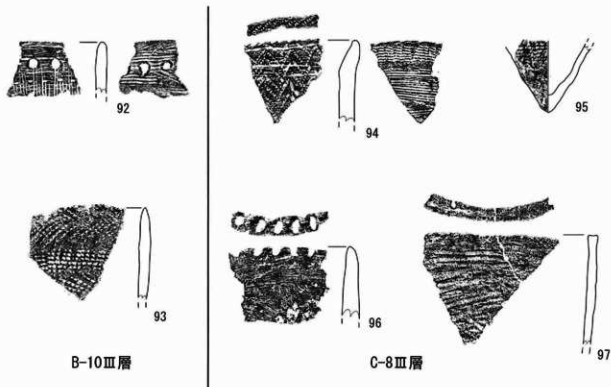
B-7Ⅲ層



B-9Ⅲ層

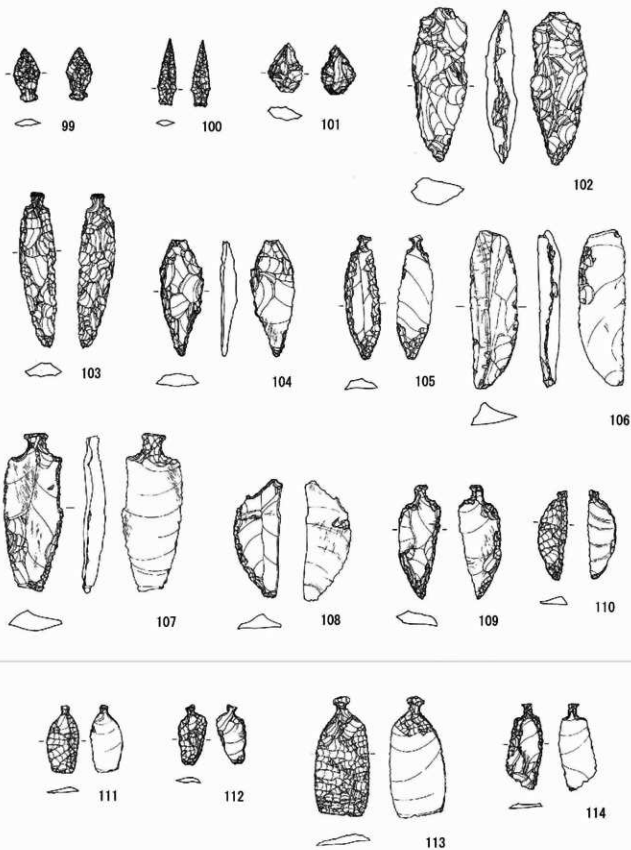


第20図 包含層出土土器⑧



第 2 1 圖 包含層出土土器⑨





第 2 2 図 包含層出土石器①

り、体部の地文は撚糸文である。内面は条痕文が施される。87)は外面が押引文、内面は条痕文が施される。88)は外面に撚糸文、内面は絡条体圧痕文が施される。89)は胎土に砂を多く含み、軟質の焼き上がりである。外面は押引文と鋸歯状の沈線文、内面は押引文とみられる。90)は外面に貝殻腹縁文が施される。91)は撚糸文とみられ、穿孔により穴が開けられる。

第21図 包含層出土石器③

92)は焼成前に穿孔により穴が開けられている。外面地文は沈線文を格子状に施し、1条の刺突文が廻る。内面は条痕文が施される。93)は胎土に砂を多く含み、もろい焼き上がりである。外面は斜行縄文と撚糸文が施される。94)は厚みのある器壁で、外面は絡条体圧痕文を鋸歯状に施し、口唇部直下に刺突文が廻る。口縁部上面にも圧痕文が施され、内面は圧痕文がみられる。95)は尖底部分で、外面に撚糸文が施される。96)は胎土に黒雲母を多く含む。無文だが口縁部を棒状工具により波状にしている。97)は調整痕による凹凸がみられる他は無文である。98)は極めて鋭利な工具によって横位の沈線文が密に施される。内面は調整による条痕がみられる。

・石器、石製品

第22図 包含層出土石器①

99)・100)は有茎の石鏃である。99)は黒曜石製、100)は頁岩製である。101)は黒曜石製の石槍あるいはナイフ類とみられ、体部の半分以上を欠損している。

102)・104)は石槍である。いずれも頁岩製で、茎部が不明瞭である。

103)・105)～114)はナイフである。106)は断面三角形で、両側縁を調整して刃部を作り出している。108)はアールのついた側縁を調整し、刃部を作り出している。その他は、片面を調整して刃部を作り出し、つまみが明瞭に作り出されている。109)は片岩製、112)はメノウ製で、他は全て頁岩製である。

第23図 包含層出土石器②

115)～119)はスクレイパーである。115)・116)・119)は扁平な礫を使用しており、116)は片岩製、その他は頁岩製である。

120)は泥岩製の石斧である。

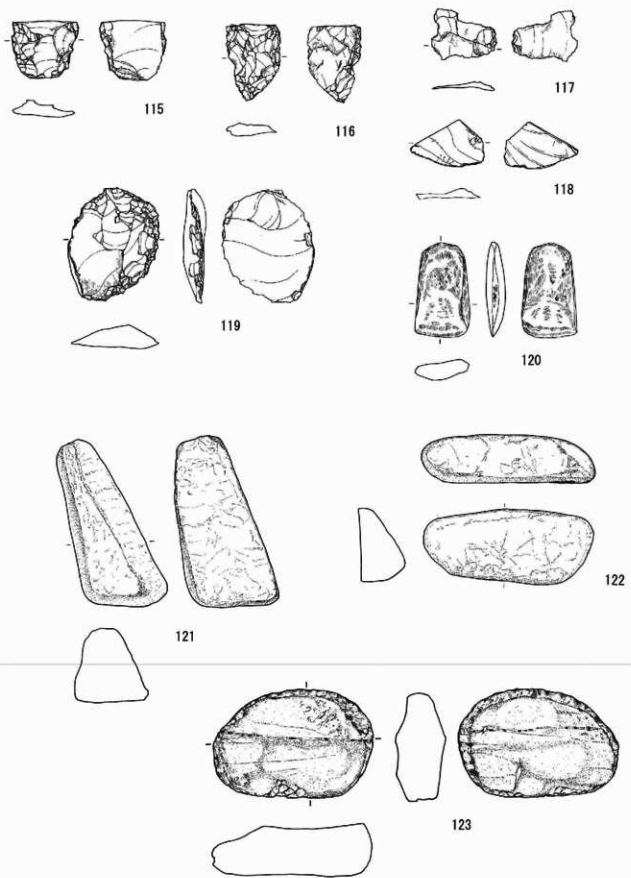
121)～123)はたたき石あるいはすり石である。121)は安山岩製で、2面を擦っている。122)は砂岩製で、扁平な円礫の側縁に敲打痕がみられ、反対側の側縁には擦痕がみられる。123)は安山岩製で、断面三角形のうち2面を擦っており、側縁に敲打痕がみられる。

第24図 包含層出土石器③、第25図 包含層出土石器④

124)～136)は石鏃である。調査区全体で285点が出土している。128)・129)・134)は扁平な大型円礫の4ヶ所を打ち欠き、130)は3ヶ所を打ち欠いている。125)は玄武岩製、132)は泥岩製、その他は安山岩製である。

137)は軽石製の砥石である。約6cmの円礫の片面を使用している。石斧のような鋭利なものを当てて研磨した痕跡が、V字型に残っている。

第26図 包含層出土石器⑤、第27図 包含層出土石器⑥・陶磁器・金属製品



第 2 3 圖 包含層出土石器②

138) は片岩の礫で、中央部に穴が開いている。穿孔によるものではなく、自然に開いたものとみられるが、用途は不明である。

139) ～141) は石皿である。139) は花崗岩製で、礫の片面が利用されているが、半分以上は欠損している。140)・141) は安山岩製で、礫の片面が利用されている。141) は擦痕が明瞭に確認できる。

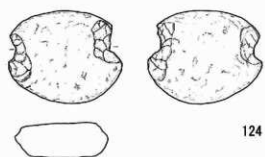
・陶磁器、金属製品等

142) は磁器の小碗である。見込み蛇ノ目軸刺ぎで、高台脇には二重圓線が染付される。18世紀後半～19世紀前半の肥前系とみられる。143) は19世紀中葉に生産された箱館焼の磁器小坏である。胎土がやや灰色がかっており、外面には八角形の枠の中に「函」の文字が染付される。箱館焼は、これまで史跡松前氏城跡福山城跡や福山城下町遺跡といった、福山市街地での出土が確認されているが、いわゆる在方での出土は今回が初めてである。144) は19世紀中葉に生産された上野・高取系中甕である。胎土は黒褐色で、外面と内面頸部に鉄釉が施される。口縁部上面は、合わせ口で窯詰めするために釉が拭き取られている。

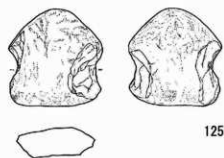
145)・146) は和釘である。147) は扁平であることから舟釘と考えられる。

このほか、図化に至らなかったが、明治～大正期にかけての陶磁器やガラス瓶が出土している。

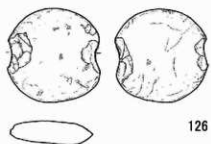
(佐藤)



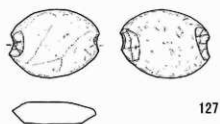
124



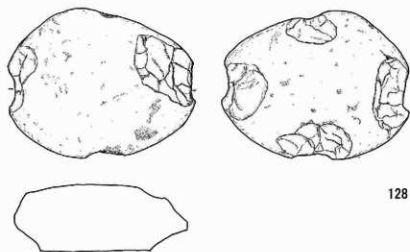
125



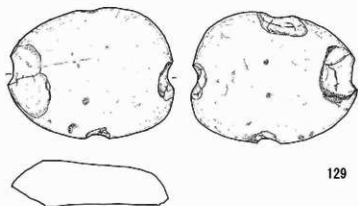
126



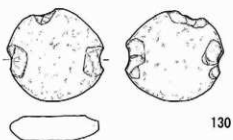
127



128



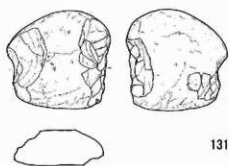
129



130



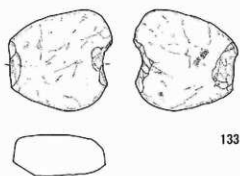
第24図 包含層出土石器③



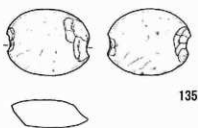
131



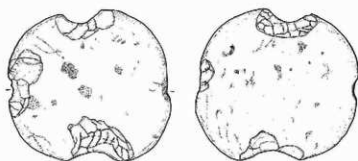
132



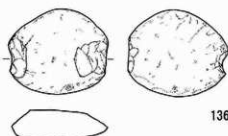
133



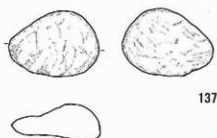
135



134



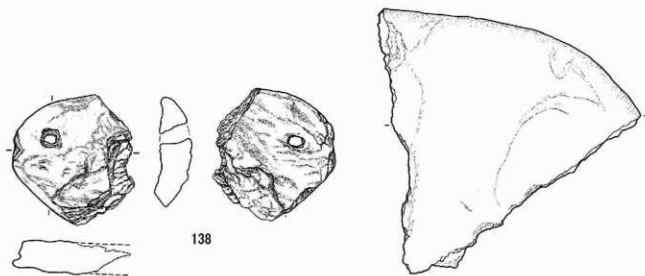
136



137

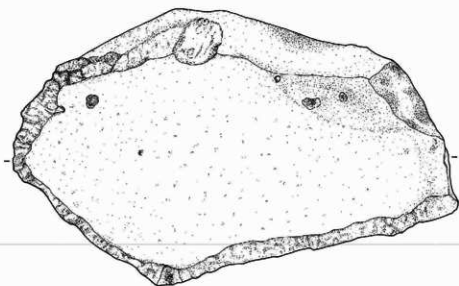


第25図 包含層出土石器④



138

139



140



第26図 包含層出土石器⑤

III まとめ

調査区は海岸段丘の縁、東西約 55m、南北約 8m、調査面積は 343 m²という比較的狭い範囲であった。土器は、縄文時代早期中葉の貝殻文沈線文土器や、これに続く貝殻条痕文系土器、東廻路系土器などが見受けられる。また、(74)・(77)は小型の無文土器で、口縁部に円形刺突文があることから、物見台式に並行するものと思われる。石器・礫石器は 1,217 点のうち、石鏝が 285 点を占める。

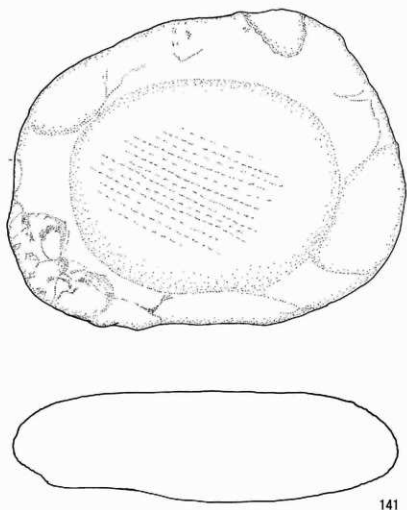
遺構は土壇 7 基、Tピット 1 基、集石遺構 1 基で、P-1～6・TP-1は縄文時代、P-7・S-1は近代の遺構である。いずれも調査区北側の平出部及び緩傾斜地から検出された。

Tピットは渡島半島で非常に多く検出されており、中でも松前町はその集中域である。これまで、標高約 20～30mの段丘面にある東山遺跡・茂草B遺跡・柵石遺跡・小浜遺跡・大津遺跡・寺町貝塚・白坂遺跡においてTピットが複数検出されている。本遺跡では 1 基のみの検出であったが、調査区外の北側にもTピットが存在する可能性が高い。

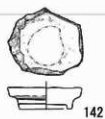
(佐藤)

参考文献

- 『大津遺跡』松前町教育委員会 1974
- 『松前町小浜遺跡発掘報告書』松前町教育委員会 1975
- 『鬼沢B遺跡・柵石遺跡調査報告』松前町教育委員会 1978
- 『茂草B遺跡調査報告』松前町教育委員会 1979
- 『白坂』松前町教育委員会 1983
- 『寺町貝塚』松前町教育委員会 1988
- 『概説 松前の歴史』松前町 1994
- 『八雲町 落部 1 遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター 2003
- 『東山遺跡』松前町教育委員会 2005
- 『総覧 縄文土器』小林達雄 編 2008



141



142



143



144



145



146



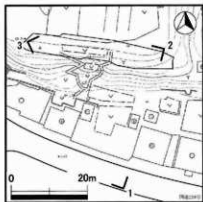
147



第27圖 包含層出土石器⑥・陶磁器・金屬製品

写 真 图 版

図版1 調査区遠景・近景



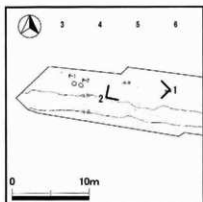
1. 調査区遠景



2. 調査区近景 (東から)



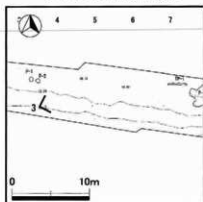
3. 調査区近景 (西から)



1. B-2・B-3 グリッド調査状況



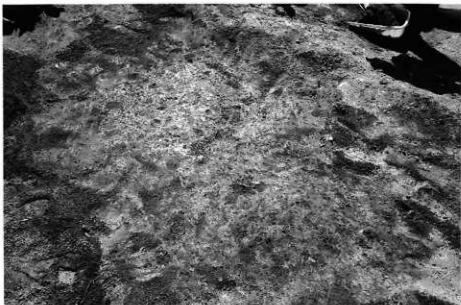
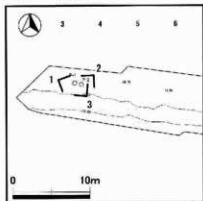
2. B-3 グリッド遺物出土状況



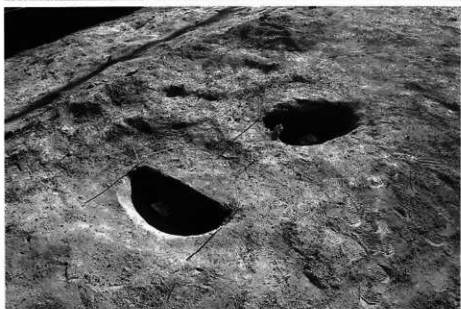
3. 表土除去後



図版3 調査状況②



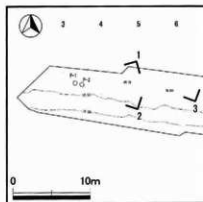
1. P-1・P-2 検出状況



2. P-1・P-2 半露状況



3. P-1・P-2 完露状況



1. 1～4 グリッド完掘状況



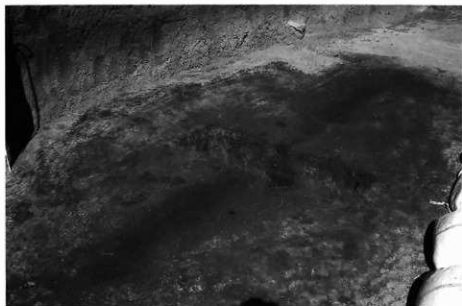
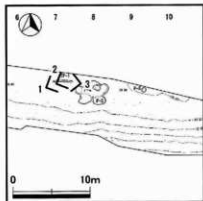
2. 1～4 グリッド北面土層断面



3. B-6 遺物出土状況



図版5 調査状況④



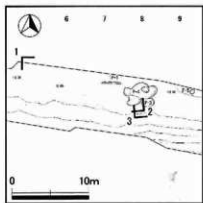
1. TP-1 検出・トレンチ調査状況



2. TP-1 土層断面



3. TP-1 完掘状況



1. 5～7グリッド完備状況

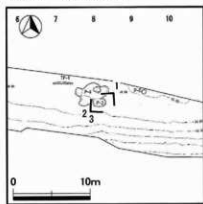


2. 5～7グリッド北面土層断面

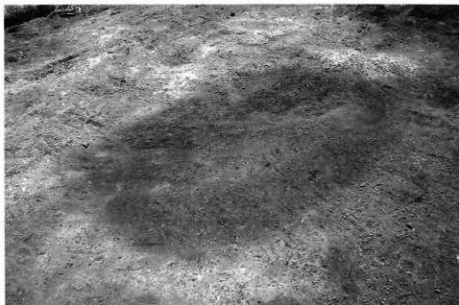


3. P3・P4検出状況

図版7 調査状況⑥



1. P-3 検出状況

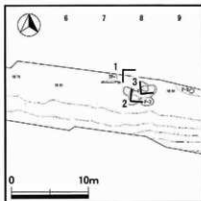


2. P-3 半截状況



3. P-3 完掘状況





1. P-3 完掘状況



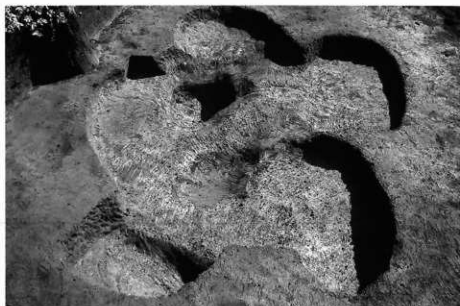
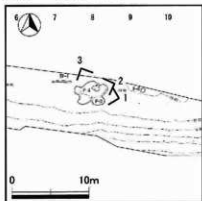
2. P-4 調査状況



3. P-4 遺物出土状況



図版9 調査状況⑧



1. P-3・P-4完掘状況①

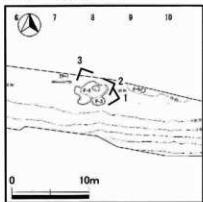


2. P-3・P-4完掘状況②



3. P-3・P-4完掘状況③

图版9 調査状況⑧



1. P-3・P-4 完掘状況①

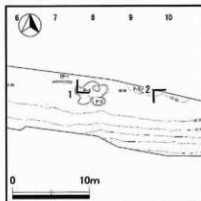


2. P-3・P-4 完掘状況②



3. P-3・P-4 完掘状況③

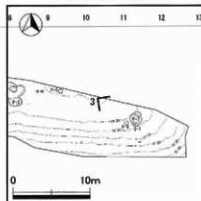
図版 1 1 調査状況①



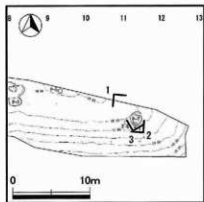
1. 7～9グリッド北面土層



2. 10ライン上層断面



3. 10～12グリッド調査状況



1. P-6・P-7・S-1 検出状況①

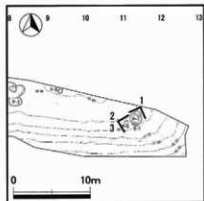


2. P-6・P-7・S-1 検出状況②



3. S-1 検出状況

图版 13 調査状況②



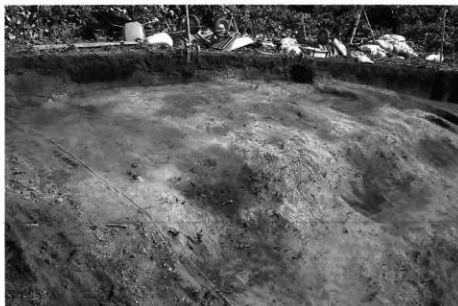
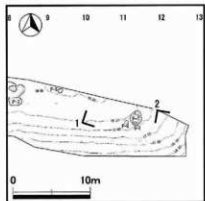
1. P-7 完掘状況



2. P-6 半掘状況



3. P-6 完掘状況



1. 10・11グリッド北側土層断面

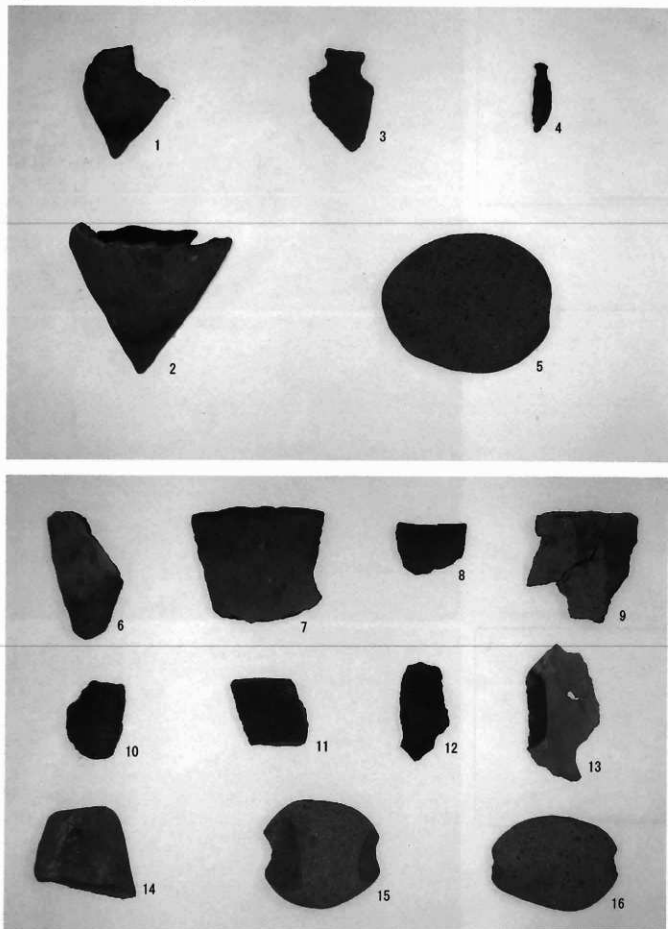


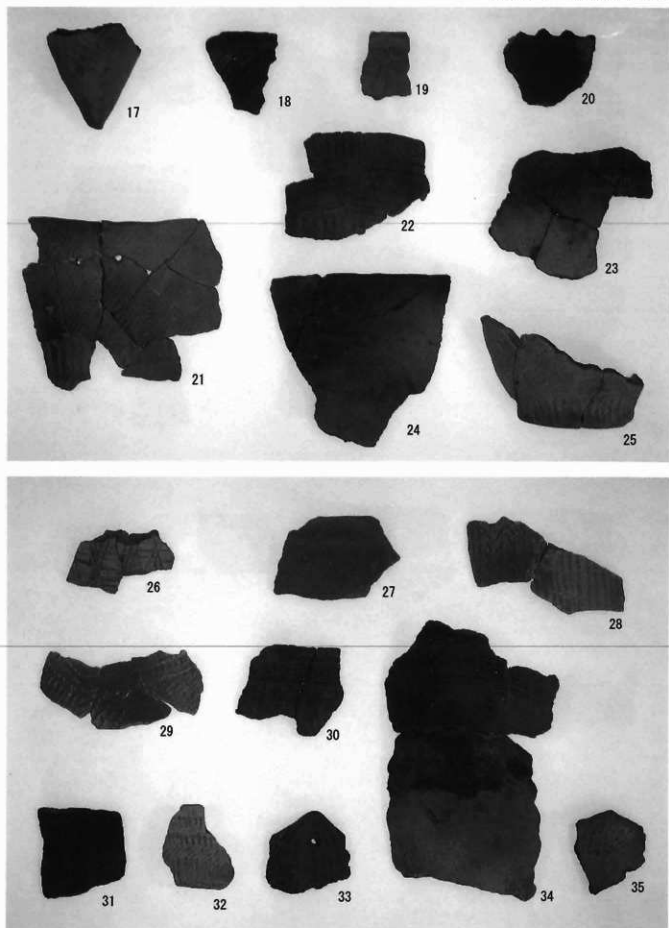
2. 12グリッド最終面調査状況



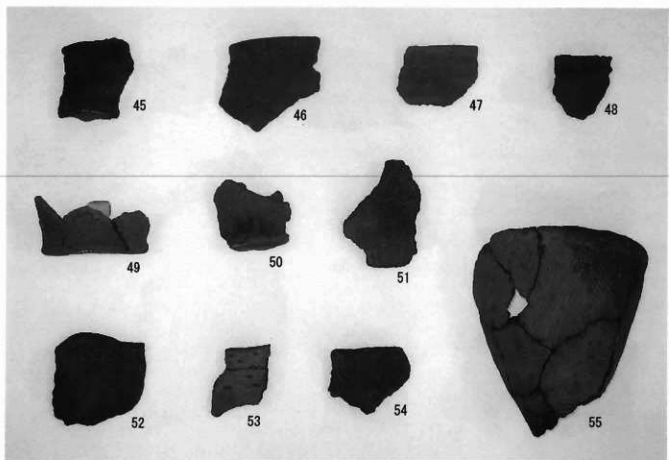
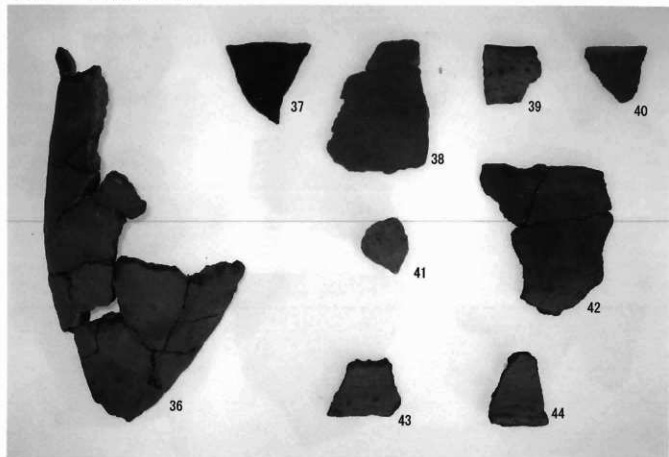
3. 調査区埋め戻し状況

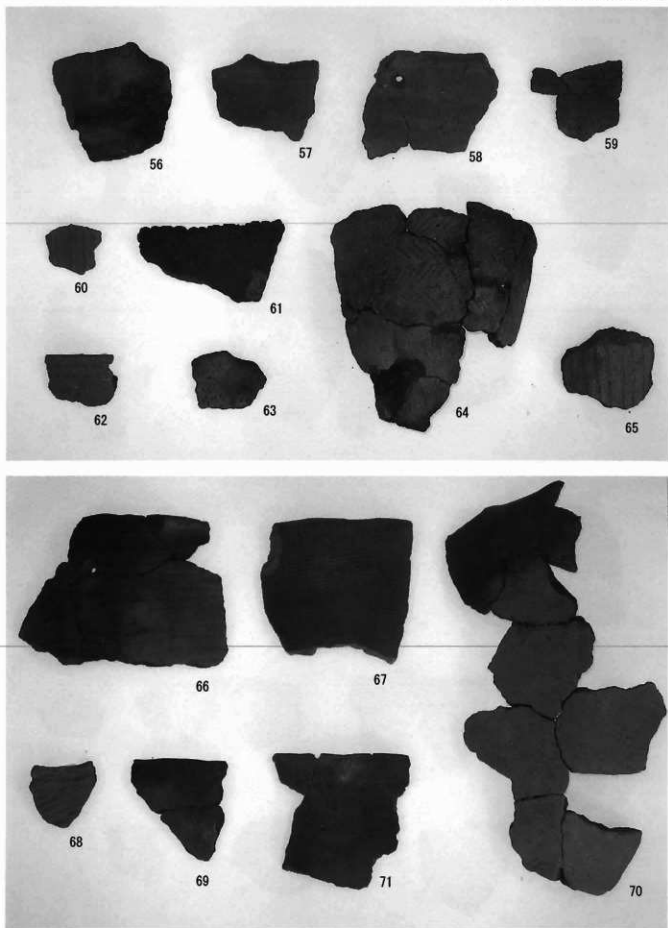
図版 15 P-3・P-4 出土遺物



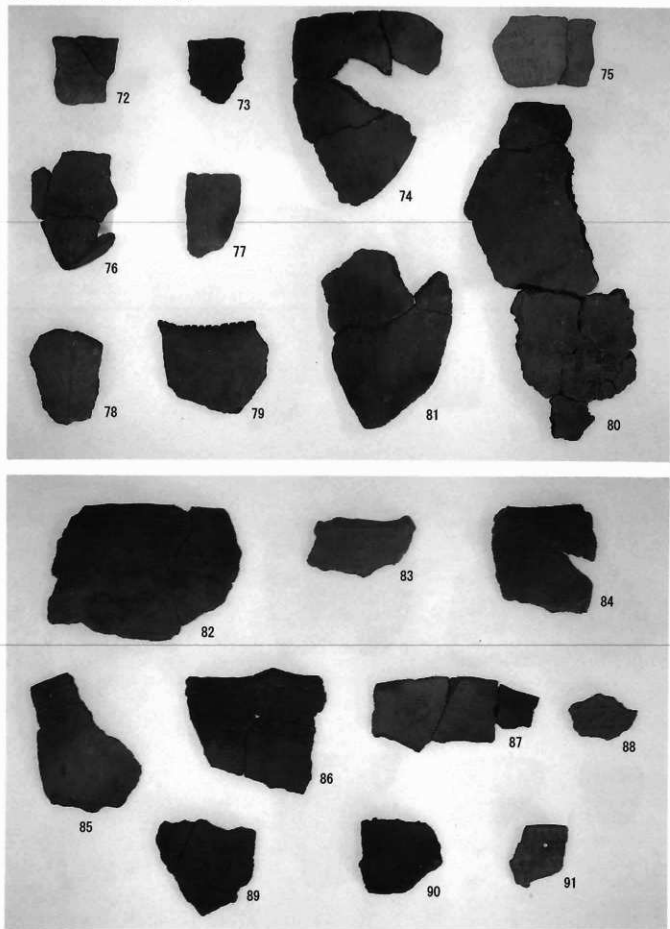


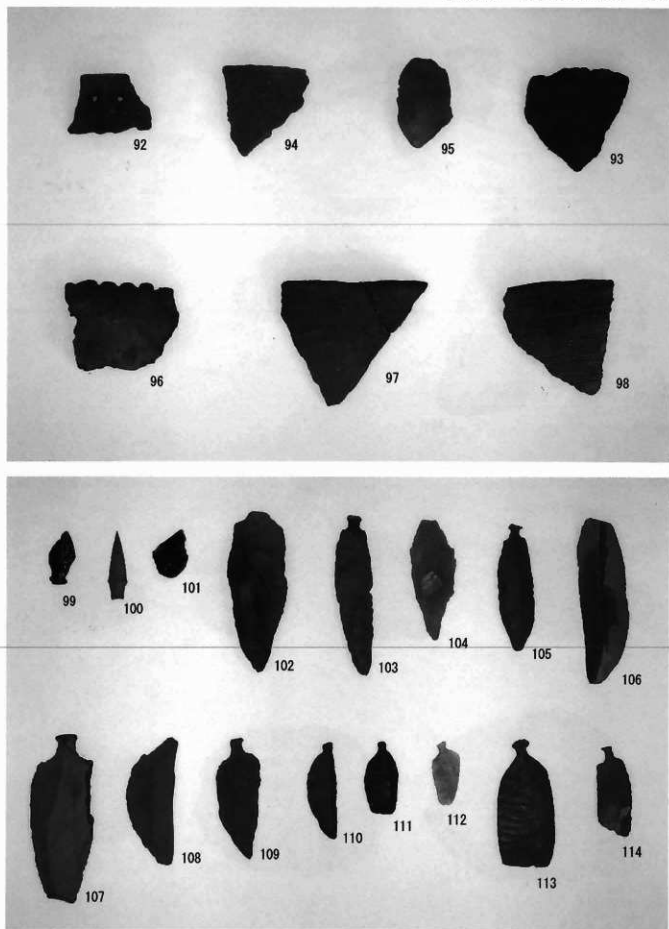
図版 17 包含層出土土器



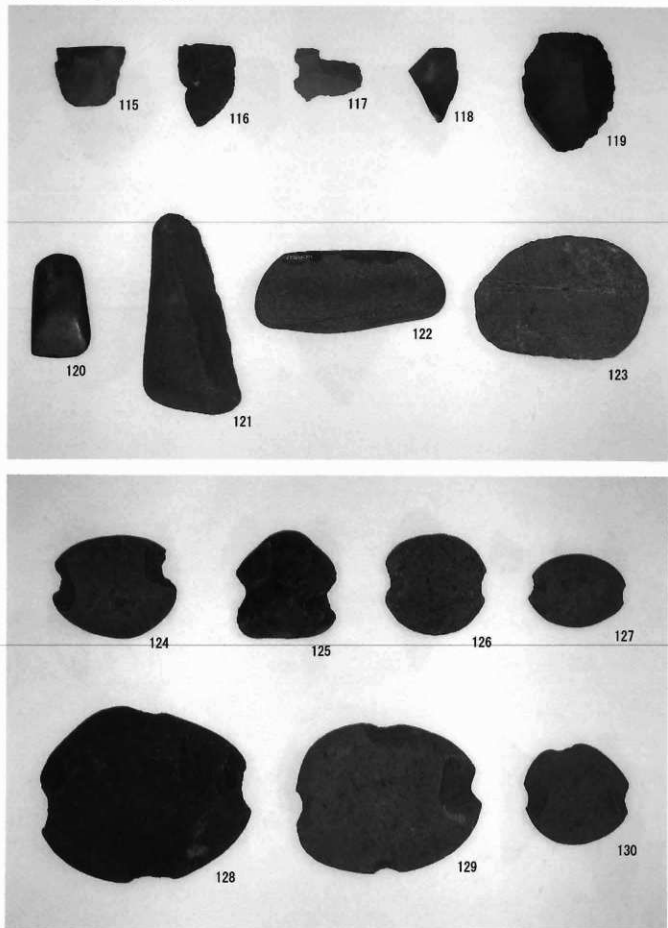


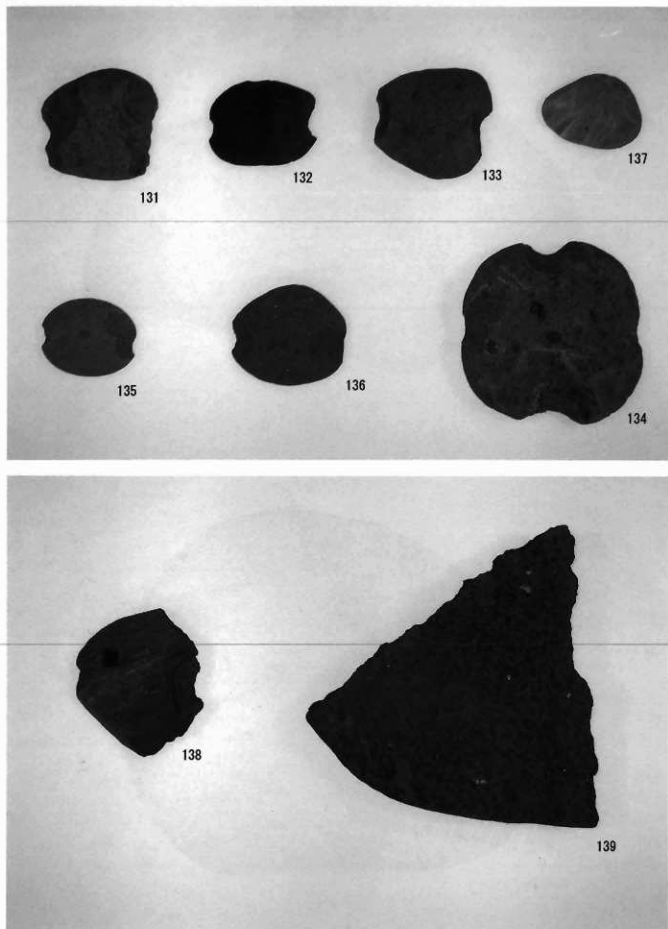
図版 19 包含層出土土器



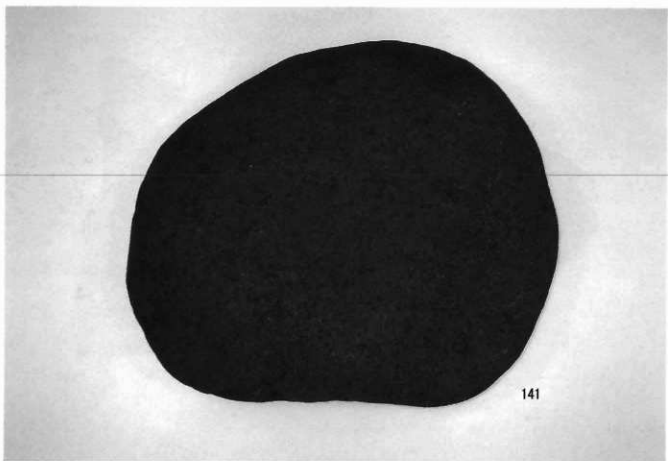
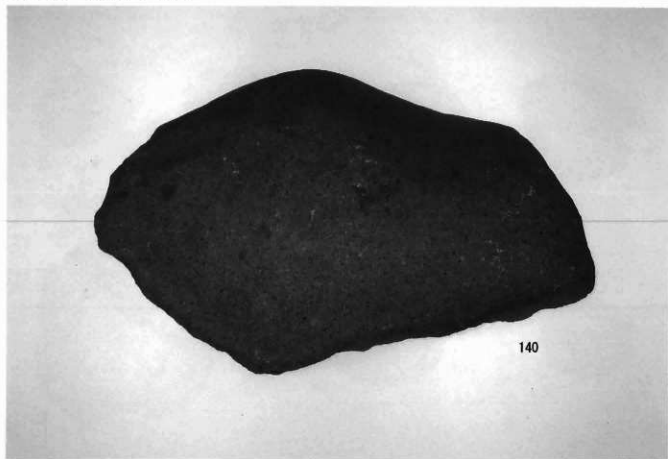


图版 2 1 包含層出土石器

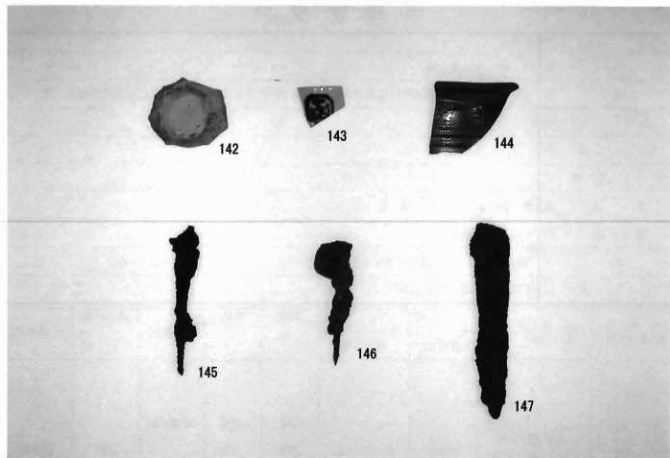




图版 2 3 包含层出土石器



图版 2 4 包含层出土陶磁器·金属制品



報告書抄録

ふりがな	たてはま いせき							
書名	館浜 G 遺跡							
副書名	-平成24年度 松前館浜11道単急傾斜地工事(特対)事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書-							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	前田 正憲・佐藤 雄生							
編集機関	松前町教育委員会							
所在地	〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明30番地 TEL.0139-42-3060							
発行年月日	平成25 (2013) 年 3 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たてはま いせき 館浜 G 遺跡	ほっかいどうまつまへん 北海道松前郡 まつまちょうあびたてはま 松前町字館浜	01331	B-02-122	41度 26分 54秒	140度 2分 35秒	20120720 ~ 20121013	343	急傾斜工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館浜 G 遺跡	遺物 包蔵地	縄文時代 早期中葉~ 前期初頭 幕末~ 明治・大正	土壌 6 基 Tピット 1 基 土壌 1 基 集石遺構 1 基	貝殻文土器、縄文土器、石器 陶磁器、金属製品				
要 約								
<p>縄文時代早期中葉の貝殻文土器や、これに続く貝殻条痕文土器、東網路系土器などが見受けられる。石器・礫石器は1,217点のうち、石鏃が285点を占める。</p> <p>遺構は土壌7基、Tピット1基、集石遺構1基で、P-1~6・TP-1は縄文時代、P-7・S-1は近代の遺構である。いずれも調査区北側の平坦部及び緩傾斜地から検出された。</p>								

館 浜 G 遺 跡

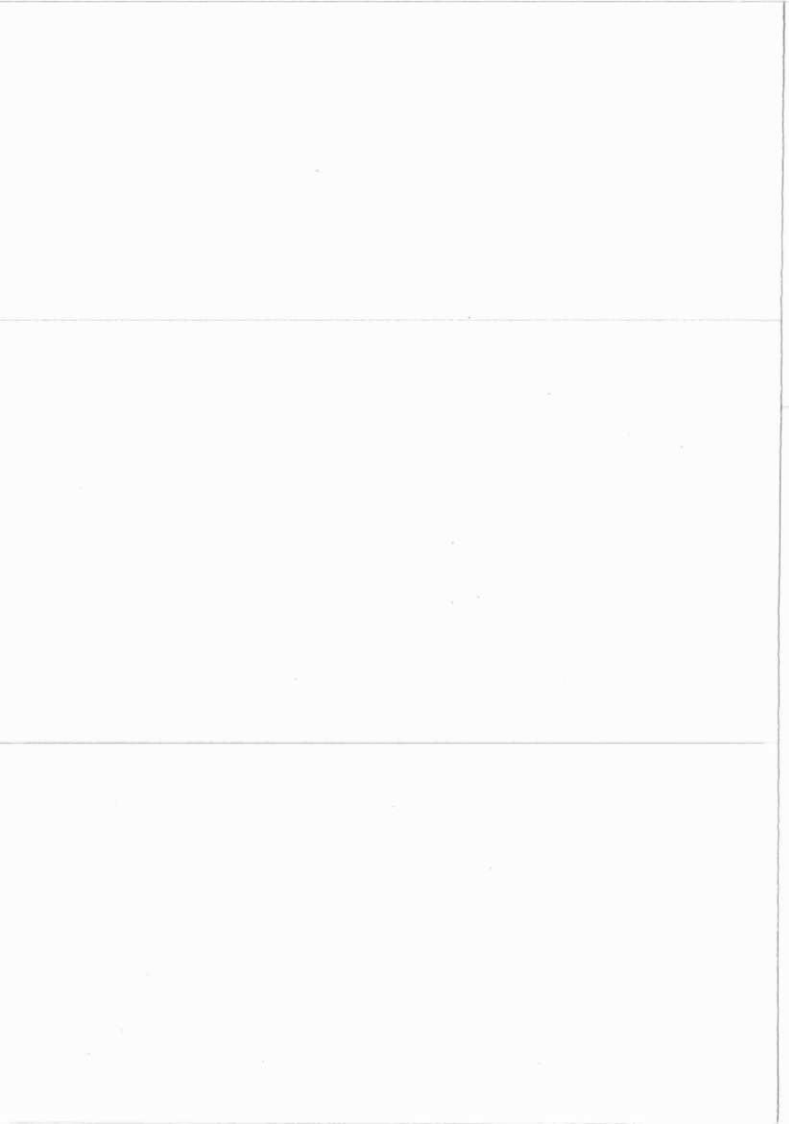
平成24年度

松前館浜11道単急傾斜地工事(特対)事業
に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行：平成 25 年 3 月 28 日

発行者：北海道松前町教育委員会

印 刷：株式会社 第一印刷



館浜 G 遺跡
**平成 24 年度 松前館浜 11 道単急傾斜地工事（特対）事業に
関わる埋蔵文化財発掘調査報告書**

電子版

2025 年 1 月 31 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060/FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：館浜 G 遺跡 平成 24 年度 松前館浜 11 道単急傾斜地
工事（特対）事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書
（2013 年 北海道松前町教育委員会発行）

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。